

---

# ホタルトヒカリ

ミナカミツカナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホタルトヒカリ

### 【Nコード】

N4447A

### 【作者名】

ミナカミツカナ

### 【あらすじ】

蛍は不思議な力が使えた。その蛍の前に、意味不明でハイテンションな少女 光が現れた！残酷な戦いはないけれど、意味不明な戦いは行われる！はずなんだよね、一応」。

第一話 意味不明！（前書き）

ハハハハハッ！

ビバ 意味不明！

## 第一話 意味不明！

ちらり、と光る、蛍の光。

蛍は、人の命だとも言われている。

少年 みずくら ほたる 水倉蛍は、町の一大プロジェクト・「蛍を助けよう」という文字が書かれた、看板を見ていた。

これ以外にも、何枚・・・いや、何十枚もの看板があるだろう。

町の小学校が書いた、看板。

町が書いた看板。

団体が書いた看板。

見れば見るほど、飽きてくる。

「つまんねーのっ」

蛍は、黄色がかかった少し深めの茶色い髪をしていて、前髪が片方の眼が隠れるほど長い。

髪より、深い色をした眼。

太いとはいえないが、細いともいえない手足。

背は普通。

結構、暗く見られるが、内面・明るい。

だが、そこらの人ほど騒がない。

蛍は、不思議な人であった。

蛍には、ある力があつた。

それは、死んだ命を集め・自分の力にする力。

しかし、蛍はそんなことには使わない。

この命を蛍に変えている。

「なーんか、蛍が命を蛍にするって、自分が増える感じだな」

蛍は、すつ、と川のほとりに立った。

ここは、蛍の生息地。

深くは無い、浅い川である。ちらほらと、蛍が光っている。

すると、蛍は足を水の上に出し、その足に体重をかけた。

そして、もう片方の足も、前に出す。

これは、いわゆる、水上歩行つてやつだ。

「ふう〜〜〜〜・・・やっぱ、自然はいいな〜〜」

とか何とか言いながら、適当に川を進む。

すると、一匹の蛍が蛍に近づいてきた。

『こんばんわ、蛍君。元気がしら？』

蛍が喋った。そして、挨拶をした。

「ああ、<sup>みつやま</sup>光山さん。元気ですよ。どうですか？蛍は」

『しあわせよ。だっているんな人が来てくれるし、この前は、家の息子たちが、わたしを見つけて、「おかあさんみたい」って言うてくれたし。ちゃんと、蛍になっても判ってくれてたし。なにより、蛍君には感謝しているわ』

「そうですか、よかったです」

すると、また蛍が近づいてきた。

『ようつ、蛍!』

「あ、電気屋のおじさん」

蛍は、オジサン蛍に話しかけられた。

『いいな、ここは! 自然が綺麗だし。しっかり、掃除もしてくれるし。見つけると喜んでくれるし』

「そっか、よかったです」

そして、また何匹も集まってきた。

『蛍お兄ちゃん! この前ね、お母さんたちが来てくれて……』

こんな、蛍の話を聞きながら、蛍は水上歩行を続けていく。そのたびに、指紋が広がっていく。

が、その瞬間。

「危ないよ? こんなところで“力”使っちゃ、ね」

聞き覚えの無い声が、上空から降ってきた。

「えっ?」

蛭は空を見上げる。

そこには、光のように綺麗な黄色の長い髪を左右耳のあたりのほうで結った髪・綺麗な黄色の眼をした可愛い少女がいた。

「こんばんわあ。蛭君だよねぇ？」

少女は、ゆつくりと、話し始める。

「えっ、誰？」

「あたしは、むらさき紫光。ひかりキミと一緒に“力”がつかえるよっ」

光と名乗った少女は、蛭より少し高い場所（もちろん、空中）で止まり、蛭を見ている。

「え………？っか何でまだ、空飛んだまま？」

「キミこそっ、いつまで水面に浮かんでる気？ここに居る皆もキミのおかげでしょっ？」

「うっ………何で判る？」

「さあ？何でしょーかつ？」

蛭は少女　光の言葉に詰まった。というより、言い返せない。全て見破られている。

「あのさっ、キミさっ。あのねっ！」

「何だよ。さつさといえよ」

蛭は、あきれたように言う。

この少女は多分、蛭と同じ年だろう。

なのに、全然フィンキが違う。

蛭は13歳にしてみれば、落ち着いたほうだろう。

しかし、光は13歳とは思えないほど、幼い。精神年齢は5〜8歳だろう。

「キミ、「世界の番人」<sup>ルイレゼ</sup>のこと知ってる？」

「ルイレゼ？」

突然振られた、意味不明な話題に、蛭の頭が「？」を浮かべた。

「世界の番人」

「意味不明。……………つか、オマエさっきいたか？」

「えっ？瞬間移動をしましたっ！」

「しました。じゃねーし」

光の普通に言った言葉に、蛭は少し眉をひそめ、言った。

「そっ？まあいいや。あのさ、世界の番人はあ、世界のバランスを守る、まあ、いわゆる警官よ。でっ、最近この中の一人……誰だか知らないけど、まあ、誰かが、バランスを崩してるの。その人は、バランスを保つ中で、二番目に重要な役なの」



「へー。で、一番は？」

蛭は興味なさそうに言う。

「キミ。命を保つ役だから」

「へー。で？」

「あれ？驚かない？なんか、つまんないっ・・・まあ、その人は、キミを狙ってるの」

「そっか、んじゃ、バイバイ」

蛭は、この意味不明な人から逃げるため、話題(?)を変え、逃げるために前足を出した。

「うん。バイバイ。気をつけてね」・・・  
「・・・じゃないよ。キミ、もしかしたら、死んじゃうかもよ？いいの？」

光は、蛭見たく水面に着かず、その寸前の空中で浮かんだ。

蛭は出した前足を引っ込めた。

「・・・いいよ。別に」

蛭は、唇を少し開いて言う。

「はあ？キミ、馬鹿あ？だってキミが死んだら、世界が崩れるから、キミの家族まで、死んじゃうよ？」

光は、呆れたように首を横に振る。

「あっそ。つーか、いねーし。家族」

「……………そうなんだ。ごめんねっ。まあ、どーでもいいけどっ！」

どーでもいいなら、言うなよ。  
つーか、どーでもいいって酷くねえ？

「ということで、まあ、これからは、今までの仕事と、その人探しをお願いね えっとね、その人の特徴は、藍色の膝まである髪・眼は髪の色と同じ・キミと同じぐらいの背・黒の大きいマントに・ドクロの刺繍入りの黒いタンクトップ・膝までのやっぱし、ドクロの刺繍入りの、半ズボン。ブーツも黒だそうで」

「そこまで知ってんなら、名前ぐらい調べとけよ」

「そうだったね。まあ、いいや。んバイバイ」

一体、何をしにきたのかと、問いかけてみたくなるような少女であった。

光は、空に急速で上がったと思うと、消えた。

「意味判んねー……………あっ、もう3時じゃん。ヤバイよ。新聞の人来ちゃうよ」

蛭はせかせかと、水上歩行をやめ、外に出る。

『バイバイ お兄ちゃんっ!』

『ありがとうね。また来てね』

『じゃーな、蛍!』

たくさん蛍に見送られて、蛍はその場を去っていった。

ポフツツ、とベッドにダイブする。

「あ~~~~~~~~~」

蛍は、ごろんつ、と仰向けになる。

天上は、真っ白。蛍光灯も付いていない。

「なんだっ たんだ? アイツ」

自分に問いかけてみたつもりであった。なのに。

「変なヤツだっ たんだ、アイツ」

「そうか、変なヤツか。それなら納得……………」  
「……………じゃねー、何で居るんだ?」

「ひつどーい! せつかく、ぜんぜん仕事の内容わかってないようだから、来てあげたのに」

と、光は頬を膨らませ言う。が、

ズルツツ

「ひあっ！？」

「うわっ！！」

光が、天井に出来た黒い穴から滑り落ちた。  
そしてそのまま、蛍の真上に落下。

「ぐむおっつ！？」

「わっ！」

蛍 重症。光 無傷。  
と言う結果でした。

「せ・・・・・・・・セーフ・・・・」

光は、安堵のため息をついた。が、その後すぐに、息切れた声が出た。

「せ・・・・・・・・セーフ・・・・じゃ・・・・ねえ・・・・」

蛍は見事に息切れを起こした。

光は、くると、向きを変え（降りていない）蛍の顔を見た。  
蛍は、青白い顔になっていた。

「大丈夫？」

んなこと心配してるんだったら、さっさと降りろ。  
と言う顔をしている、蛍を無視し、光は続ける。

「あのね、たまに戦いでこういふときもあるから、慣れておいたほうがいいよ」

慣れたくねー。

「でねっ、その戦いつてね……………」

光の話は、1時間はかかった。

そして、光は蛍から降りた。

もちろん、蛍は、生死の二択を選びそうになった。

ギリギリ、生きれたが。

しかし。

「この家に、住むことにしましたあっ！」

という、かなり最悪なプランつきの。

誰か……………助けて。

つか、本来の目的より、コメディイにいつてるような……………

「ほったつるー！テレビ、見ていい？」

呼び捨てだし。

もう、オレが蛭になりたい。  
そして、コイツから離れたい。  
わ

っ  
っ  
!!

ヘルプ・ミ

!!

第一話 意味不明！（後書き）

うん……。これからもっとマシなものを作っていく  
たいと思います！

謎の料理！？（前書き）

なんか、全然ワケわかんなくなつた。



謎の料理！？

わ

ツッ！！

そんなことも、気にせず、コメディ番組を見る光であった。

「・・・オマ・・・ホントに女か？」

蛭は、眼を大きくし、光を見た。

「なによあつ！失礼ね！女よ！証拠でも見せようか！？」  
と言つて、光は服を脱ごうとした。

「いやいやいやいやいやつつつ！！！違う、違う！！」  
「ふへっ？」

蛭は、顔を真つ赤にしながら、後ろを向き、反論した。

「なんで、オマエは料理がつくれねえんだ！？」

そして、ようやく本題に入った。

「????作つたじゃん」

光は、ぶー、と顔を膨らます。

「コレは、食い物か！？」

蛭の指差す先、ソコには、ハエが飛んでいる・真つ黒・形がわからなくなつた、（光が言うには、「アップルパイ」）謎のゴミがあつた。

「ゴミ！？失礼ね　！！じゃあ、食べてみなさいっ！」

光は、テーブルから立ち上がった。

「いやーだー！！オマエが食え！！」

「いやっ！まずいもん！！」

「まずいんじゃないか！」

「気のせいだよ！！」

「はいっ！」

「ぶっ！！」

突如、光の言葉がさえぎられた。

「おらっ、オマエの作った『飯』だ」

「ふぬーふぬーふぬー！！」

光は、顔を青白くさせ、必死に抵抗した。

だが、蛍の力によって、ソレは無効化になった。

「ふぬーふぬーふぬー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「

「？」

蛍は、光の顔をのぞいてみた。

その瞬間。

「ぶほおっ！？」

「いええーい キミも食べてよね あたしは、食べたんだから」

光が、にやつ、と笑いながら蛍の顔に、「謎」を突きつける。

「ぶぐ！？」

しかし、光の力は弱く、すぐに押し戻されてしまった。

「・・・・・・・・おげええええええええええええ・・・・・・・・」

蛍は、すぐに放されたといえ、あの「謎」を突きつけられたので、すぐさま、トイレに向かった。

「？おつかしーなー？材料間違えたかな？」

光は、料理の本を覗き込む。

「・・・・・・・・・・あっ、リンゴじゃなくて、パプリカ入れちゃった……。砂糖じゃなくて、塩か……。パイ生地じゃなくて、

粘土！？まア色が似てるからしょうがないね・・・焼き加減、千度じゃあなかつたの！？・・・清潔な器具？あー・・・外用のおもちやじゃあだめだったか・・・」

そして、螢は、トイレでぐったり・・・。

ようちく出てきたとき。

「? ? ? ? ? ? ? ? ? ?」

蛍の鼻が動いた。

いい香り？

不審に思って、キッチンに行くと・・・。

[illegible]

ソコには、エプロン姿の光がおいしそうな、パイを持っていた。

「あつ、やつとでてきたあゝ！今、焼けたよ！」

光はパイを蛍の場所まで持ってきた。

確かに、いい焼き加減であつたし、いい香りもする。

ためしに恐る恐る、パイに手を伸ばし、パイを口に入れる。

!

「食べる！食べたよ！死ななかつたよ！！」

「ちよつと失礼なトコもあつたけど、ソレはよかつた！」

そして、席について、ゆっくり食べる。

「あつ、さつきはごめんね。間違えて、リンゴ パプリカ・砂糖  
塩・パイ生地 粘土・焼き加減 千度・器具 外のおもちや  
ったから、まづくなっちゃった！」

「ブ  
！！！」

蛭は、飲んでいたお茶を思いっきり噴出した。

「あつ、汚い！蛭！！！」

「なななななななな・・なんてモン食わすんだ！！！」

蛭は、わなわなと震えだした。

「大丈夫！コレはしっかりやったから！」

「あ  
・・」

蛭の運命尽きたなり！

はっぴーえんど

## 謎の料理！？（後書き）

本来、ファンタジーだったような気がするんですけど・・・、コメ  
ディー？次回からは・・・？まア・・・いいや。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4447a/>

---

ホタルトヒカリ

2010年10月9日21時40分発行